

博士論文の要約

氏名：宋丹丹 SONG DANDAN

論文題目：身体と心性の視点からみた岩石伝承——通過儀礼を中心に

本論文は身体と心性の視点から、岩石を用いた通過儀礼をはじめ、岩石にかかわる習俗や信仰などの考察を通して、岩石信仰の特徴を民俗学の方法論で分析し、岩石と人との関わりを解明するものである。

人間は自然に取り囲まれて生活している。そして、五感を通して自然を認識し、利用して生きてきた。また、山や川、森などの自然環境から人々の生業や信仰などが培われてきた。岩石は、動物や植物と並んで自然の主要な構成要素の一つであり、人々の営みによって日常生活のなかに取り入れられ、現在まで伝承されてきた。なかでも、人の誕生から死までの各段階に行われる通過儀礼には、岩石が用いられる場合が多い。例えば安産の鎮懐石、病氣平癒の岩神、死者の枕としての枕石などである。

岩石信仰に関する研究は、民俗学をはじめ、宗教学、考古学、歴史学など多様な分野から行われてきた。しかし、岩石がいかに人々の生活の中に取り入れられてきたのかについての研究は、あまりなされてこなかった。そのため本論文では、岩石信仰に関する先行研究をもとに、岩石を用いた通過儀礼に注目し、身体と心性の視点から岩石の意味づけ、特徴やその信仰を明らかにする。それを通して、岩石と人間の関係性を考察することを目的とする。なお身体と心性の視点は、小松和彦がよりリアルな民俗社会を描き出すため、感性とそれによって引き起こされる生理に身を寄せて、身体と心性の関係に注目して構築を試みた「感性の民俗学」に依拠している。

従って本論では、自然物としての岩石が通過儀礼のなかでいかに用いられてきたのか、さらにいかに日常生活や信仰のなかで取り入れられたのかに注目し、身体と心性の視点から、「通過儀礼と岩石」（第二章、第三章）、「日常生活と岩石」（第四章、第五章）、「境界の岩石」（第六章）および「中国の岩石信仰」（第七章）といった章立てで分析した。

序章では、岩石信仰の特徴を分析し、岩石と人との関係を解明するという本論の目的のために、身体と心性を含む研究方法を紹介したうえで、本論文の構成を示した。

第一章では、民俗学を中心に地質学、環境民俗学などの先行研究も視野に入れ、岩石と人間のかかわりに関する研究を幅広くまとめた。従来の研究では、岩石信仰や岩石の伝承、他の信仰・習俗との習合などに重点が置かれたため、岩石と通過儀礼についての研究は少なかった。また、本研究のように「岩石に腰掛ける」、「岩石を撫でる」など、岩石に対する人々の身体行為に注目して分析する研究はほとんど見られなかった点を指摘した。

第二章では、近代における全国の産育習俗を集めた『日本産育習俗資料集成』をもとに、岩石を用いた産育儀礼の290件に及ぶ事例を分析し、岩石の形態や岩石に加えた身体行為に注目して、産育儀礼と岩石との関係を分析した。とくに従来の研究では子授け、安産、子どもの成長など、無事に生まれ育つことを前提として分析する傾向が強かった。これに対して本章では、安産祈願だけではなく、避妊、墮胎と間引きの習俗にも注目して分析を

行った。産育儀礼のなかで用いられた岩石は、安産を願うほかに、避妊や墮胎、間引きにも用いられていたことを具体的に明らかにした。これによって、岩石に託された「産む」ことを願う民俗の心性だけでなく、「産まない」ことを願う民俗の心性にも迫ることができたと言える。

第三章では、文化庁編『日本民俗地図 7 葬制・墓制』と国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成』（東日本編・西日本編）に所収された事例のなかから岩石を用いた葬送儀礼を取り上げ、その特徴、働き、そして岩石への信仰を分析した。特に、明治政府の法令や高度経済成長期などの社会変化のなかで、岩石を用いた習俗が変容したことを明らかにした。また、人々にとって最も重要な生と死に関する儀礼のなかで、岩石は長らく用いられてきたことを指摘し、とくに身体行為を伴いながら岩石に祈願するという特徴を指摘した。

第四章では、岩石をいかに日常生活のなかに取り入れたのかを明らかにするために、病氣平癒のなかで用いられた岩石や、岩石に触れたら病気になる禁忌など、病にまつわる習俗を検討した。病氣平癒を祈願する際に、川原石、穴あき石など特別な石を用いた特徴が明らかとなった。また、岩石で撫でる、擦るなどの身体行為によって病氣平癒を祈願することに対して、触ると病気になる岩石伝承も視野に入れ、身体行為と岩石の呪術性を関連づけた。

第五章では、まず第1節にて伝説における岩石について分析し、とくに夜泣き石、血の出る石、話す石など、岩石と身体の関係性に注目した。また第2節では、身体と心性の視点から岩石に聖性が発生する理由を検討した。これまでの研究の焦点は岩石そのものや、岩石の置かれる場所など「もの（形）」と「場（空間）」にあり、人間の行為はあまり注目されてこなかったと言える。しかし本節で論じたように、岩石に祈願する際、岩石を撫でる、跨ぐ、積むなどの行為を伴うことによって、岩石に宿る力を促す、または顕在化させることができるとみなされていたことが明らかとなった。

第六章では、境界における妖怪・怪異と岩石の関わりを論じた。とくに女性が岩石となった化石伝説を中心に、岩石に生じる怪異を論じることによって、岩石の境界性を明らかにした。

第七章では、身体と心性の視点から中国の岩石信仰を紹介した。中国は多民族であるため、岩石信仰の形態は多様である。そのなかで、人々が身体行為を加えて岩石を信仰していた点などを指摘した。

終章では、各章で明らかにした点をまとめ、全体の結論と今後の展望を提示した。結論は以下の三点になる。第一点は、通過儀礼において、岩石が重要な役割を果たしていた点である。本研究で考察したように、子授け祈願から、出産・育児の儀礼、死をめぐる儀礼といった、人の一生の重要な節目において岩石が用いられていたことを明らかにした。時代の変化によって岩石を用いた儀礼は次第に行われなくなってきたが、現代まで見られる儀礼や、新しく作られた儀礼もある。このように、通過儀礼において岩石は欠かすことができない存在であり、岩石への祈願や信仰などは人々の生活のなかで絶えることなく続いてきたことが指摘できる。通過儀礼という一生の重要な節目で岩石を用いたのは、岩石の境界的な性格を利用したからではないかと考えられる。つまり、岩石を用いることによって時間や空間に区切りをつけたのだと理解できる。

第二点は、岩石信仰において、岩石の特徴的な外見や、河辺などにあるという、もと置かれていた場所が重視されるという点である。本論の考察を通して、色、形などの形態に特色のある石が通過儀礼のなかで用いられていたことが明らかとなった。たとえば、産飯の際に用いられた小石は、多くの地域ではその形が丸ければ丸いほどよいと考えていた。また河原石を用いた儀礼や習俗も数多くみられる。このように、岩石の外見や置かれていた場所を重視することは、岩石信仰の特徴の一つと言える。

第三点は、岩石の儀礼や岩石の習俗を人々が身体行為を加えて行っていた点である。従来の研究では、岩石が信仰対象となった二つの要因として、一つは岩石そのものが霊力を持つこと、一つは神の依り代とされたことを挙げている。それに加えて、本論文の考察を通して、人間が岩石に身体行為を加えることも、岩石にやどる力を促す、または顕在化させる条件の一つであることを指摘することができた。また通過儀礼の分析から、人間が岩石をいかに生活の中に取り入れてきたかも、明らかにした。

今後の課題として、本論をもとに、中国の岩石信仰と通過儀礼を視野に入れ、日中の比較研究を進めていく予定である。そして、日中両国ひいては東アジアの岩石信仰についてさらに研究を進めることによって、より深く人間と岩石との関わりを考察していきたい。